「教育原論」における学生の教育観の形成に関する考察
―教員養成課程の授業を通して―

胡　田　裕　教†

Formation of Views on Education by College Students: Some Observations in "Educational Principles" a Teacher Training Course

EBITA Hiroyuki

Abstract

The purpose of this research is to explore the current situation and issues of educational ideas that show interests in the process of forming a view of education that first-year college students, aiming to become teachers and belonging to a teacher training course, should acquire for their future profession. As a result, it became clear that they were interested in their own questions as to what was necessary to solve problems in current education. Clarified here also, as factors to promote, was the importance of re-encountering educational ideas that touched their hearts in the past, to be able to think in connection with one's own specialty, and to have a variety of human relations.

キーワード：教育原論，教育観，教員養成課程の授業

Keywords: educational principles, view of education, teacher training course class

---

†大阪産業大学 全学教育機構 教職教育センター 非常勤講師

草 稿 提 出 日　10月31日

最終原稿提出日　11月11日

1．問題の所在と目的

現代は，変化が激しく常に新しい未知の課題に試行錯誤しながらも対応することが求められるとする知識基盤社会であると言われている。また，内閣府では，サイバー空間（仮想空間）とフィジカル空間（現実空間）を高度に融合させたシステムにより，経済発展と社会的課題の解決を両立する，人間中心の社会（Society）であるとするSociety 5.0[1)]を『第５期科学技術基本計画』（内閣府，2016）に盛り込み，新しい価値の創造が目指されている。そういう時代の中で学校教育に目を向けると，初等中等教育段階では自己の（在り方）生き方を探求する観点からキャリア教育の重要性が言及されている。例えば，高等学校学習指導要領（平成30年告知）（文部科学省，2018）の総則「第５款 生徒の発達の支援」では，「生徒が，学ぶことと自己の将来とのつながりを見通しながら，社会的・職業的自立に向けて必要な基盤となる資質・能力を身に付けていくことができるよう，特別活動を要としつつ各教科・科目等の特質に応じて，キャリア教育の充実を図ること。その中で，生徒が自己の在り方生き方を考え主体的に進路を選択することができるよう，学校の教育活動全体を通じ，組織的かつ計画的な進路指導を行うこと」としている。一方，カリキュラムの観点から考えると，学習指導要領のこの度の改訂では，「社会に開かれた教育課程」の実現を目指し，①「何を」②「どのように学び」③「何ができるようになるか」④「そして，その成果をどう評価するか」というカリキュラムマネジメントの必要性を提示している。これを先ほどのキャリア教育に関連して考えると，現在では様々な活動が行われるようになり，その多様性が一つの特色になっている。しかし，その一方で，何をもってキャリア教育といえるのかという概念そのものが拡散しているともいえる。現在では，「キャリア教育の全体像を示す理論的枠組みが明確ではなく，カリキュラムに組み込まれるべき要素が何であるかについてカリキュラムをデザインする者が参照しうるような基本的枠組みも存在していない」（胡田，2020）のである。これらに対処した研究を構想したうえで，キャリア教育のカリキュラム論を導き出す必要があると考えられる。しかし，それと同時に，教師自身に目を向けると，そうしたカリキュラムのもと教育実践を行う前提として，教師には教育をどのように捉えるかという教育観が重要になる。なぜなら，教育観はそうしたカリキュラムの作成や捉え方，または教育実践の土台となる性質を持つからである。また，その深さや広がりに応じて，同じカリキュラムであっても，教育実践における教師の立ち位置や方法が少なからず異なる場合が生じる。そして，それらが教育を受ける児童生徒に影響を与えることになる。これはキャリア教育に限らず，教師が行うあらゆる教育活動に関連する。また，変化が激しい今の時代において，教育観というものにも何らかの変化が生じることになるかもしれない。

本研究では教員養成課程に所属する，教師を目指す大学１年生がこれから身につけるべき教育観の形成過程において，これまでの教育学者，教育思想家のどのような考え方に興味や関心を示し影響されるのかということに関して，その現状と課題について探索的に考察することを目的とする。

教職課程において，教育についての考え方，思想を扱う授業科目に「教育原論」（他に，「教育原理」などの名称も使用されている）がある。その「教育原論」の授業実践を扱った先行研究としては，近年では，萩原（2017），安部（2017），前田（2017）がある。中でも，安部（2017）は，「教育観」の形成を取り扱っているという点で本研究と共通する。そこでは，一人の人物（児童文学作家）を通して得た学生の「教育観」が詳細に示されている。本研究では多くの教育学者，教育思想家の中から主体的に一人を選択する中で学生の興味・関心について考察するところに特徴がある。教員養成課程に所属する，教師を目指す大学１年生が，将来教師になって子どもたちを育てるうえで，どういった興味・関心から教育観を形成していくのかを確認することは意義あることと思われる。

２．研究方法

（１）研究対象等

20XX年度[2)]，養護教諭養成課程に所属する入学したばかりの大学１年生42名を対象にした。その学生たちに対して，筆者は「教育原論」として半期（前期）の授業を行った。「教育原論」は教職課程における「教育の基礎的理解に関する科目」の中の「教育の理念並びに教育に関する歴史及び思想」について取り扱う科目である。学生たちは，「教育全般」，「日本の教育」，「学校全般」，「日本の学校」，「教育に対する具体的な考え方・思想」，「教育における現代的課題」について，養護教諭という立場からどのようにつなげることができるのかということを思考しながら受講した。

（２）調査時期と方法

調査時期は，20XX年度前期の第５回から第10回までの授業において，年代ごとの代表的な教育学者や教育思想家の考え方や行ってきた内容，成果を学習した。そのうえで，第11回の授業で「自分が一番関心のある教育学者，教育思想家を一人取り上げ論じよ。」という課題レポート（Ａ４版１枚）を提示した。その際，記述した文章に対して内容に適したタイトルをつけること，人物を選出した理由も添えて記述すること，そして，授業で取り扱った人物以外の人物を選択してもよい，という指定をした。なお，タイトルをつける理由は，学生がその人物のどこに焦点を当てて記述したのかが明確に現れると考えたから

である。また，学生自身の個性も表出しやすいと考えた。それを受けて本研究では，その課題レポートに記述された内容について，教育の考え方における学生の興味・関心に焦点化し探索的に考察を行う。

（3）授業について（その全体像と背景）

「教育原論」の授業内容を示したものが表1である。授業目標としては，教育学の基礎的事項を踏まえながら，教育の理念，歴史，思想等について自分の言葉で説明することができる。また，学校教育を中心に現代社会の教育にかかわる課題について主体的に考え，自分の言葉で意見を述べることができるとした。授業計画・方法としては，これまでの教育及び学校の営みがどのように捉えられ変遷してきたのかを教育の基礎的概念，歴史，思想等を通して考えたうえで，子どもたちと学校，社会，家庭との関係の中で生じる現代的課題にどう取り組むのかを考えるための知識・活用の修得を目指すとした。また，授業の形式としては，授業終了後にA4版用紙1枚に集約したフォーマットに「授業の中で一番大切だと思ったこと」と「疑問事項」をそれぞれ3行程度で毎回記述することとし，前回までの授業で自分が記述した内容をすぐに確認できる状態にしている。この取り組みは，「一枚ポートフォリオ評価」（2013，堀）を参考にしながら，筆者が改良を加えて作成したものである。「一枚ポートフォリオ評価」の考え方として，堀（2013）では，学習履歴として記述することで，「『既知』と『未知』との葛藤や調節という相互作用を経ながら『既知』なるものが組み替えられていく」とし，それは，「構成主義の考えに基づく学習・授業観を背景にしている」としている。また，「学習の成果を適切にみとるパフォーマンス評価の導入」であると提案者の立場から述べている。前述した「疑問事項」については，教員に対して質問を行うというよりもむしろ，「これはどうなっているのだろうか，調べてみよう。」というような自分に対して問いを立てるという項目である。これらを毎回行い，それに対するフィードバックを授業担当者（筆者）から毎回得ながら，学生は改めて考え自己を俯瞰するという学習を進める。そのうえで，自分で調べた内容については各自で保存・保管をしておくように指示をした。それが本研究の分析対象である課題レポートにつながることになる。そして，第11回以降の授業では，それらと現代的課題との接点を探索するうえで重要と思われるテーマを取り上げて授業を展開した。

次に，第5回から第10回までの授業において実際に取り上げた各年代の代表的な人物を以下に列挙する。第5回（ソクラテス，プラトン，アリストテレス，プロタゴラス，ゴルギアス，イソクラテス），第6回（ヨハネス・アモス・コメニウス，ジョン・ロック，ジャン・ジャック・ルソー，イマヌエル・カント），第7回（ヨハン・ハインリヒ・ペスタロッ

チ，フリードリヒ・W・A・フレーベル，ヨハン・フレードリヒ・ヘルバルト），第８回（ジョン・デューイ，ウィリアム・ヒアド・キルパトリック，ウィリアム・C・バグリー，ロバート・M・ハッチンズ，テオドール・ブラメルド，ジェローム・S・ブルーナー），第９回（ゲオルグ・ケルシェンシュタイナー，ヘルマン・リーツ，ペーターペーターゼン，ヴィルヘルム・ディルタイ，エドウァルト・シュプランガー，エレン・ケイ，マリア・モンテッソーリ，ルドルフ・シュタイナー），第10回（ミシェル・フーコー，フィリップ・アリエス，イヴァン・イリイチ，パウロ・フレイレ，ユルゲン・ハーバーマス，リチャード・ローティ，ガート・ビースタ）の34名である。第５回から第10回の６回分の授業を通じて，多くの人物を扱ったことから一人ひとりすべての人物を深く掘り下げることはせず，また，要点だけを示した人物も含まれる。各授業で扱った人物の考え方に少しでも触

表１　「教育原論」に関する授業の内容

回	授業内容・方法	授業外学習指示
第１回	オリエンテーション等 （授業計画またはその進め方，評価方法等についてシラバスを確認しながら行う。）	自分が受けてきた学校教育について思いを巡らす。
第２回	教育の概念・理念１ （教育とは何か）	書籍等を通して，「教育」とは何かについて考える。
第３回	教育の概念・理念２ （学校とは何か１）／学校の成り立ち	書籍等を通して，「学校」とは何かについてその成り立ちから考える。
第４回	教育の概念・理念３ （学校とは何か２）／日本の学校	書籍等を通して，日本の学校の歴史について考える。
第５回	教育の歴史と思想１ （教育思想の源流）	書籍等を通して，古代ギリシャの代表的な教育思想家について調べる。
第６回	教育の歴史と思想２ （近代教育思想１）	書籍等を通して，近代の代表的な教育思想家について調べる。
第７回	教育の歴史と思想３ （近代教育思想２）	書籍等を通して，近代の代表的な教育思想家について調べる。
第８回	教育の歴史と思想４ （20世紀のアメリカを中心とした教育思想）	書籍等を通して，20世紀のアメリカの代表的な教育思想家について調べる。
第９回	教育の歴史と思想５ （20世紀のドイツを中心とした教育思想）	書籍等を通して，20世紀のドイツの代表的な教育思想家について調べる。
第10回	教育の歴史と思想６ （現代の教育思想）	書籍等を通して，現代の代表的な教育思想家について調べる。
第11回	教育をめぐる現代的課題１ （教職の意義１）	教師の仕事や教職キャリアに関する内容について調べる。
第12回	教育をめぐる現代的課題２ （教職の意義２）	教師の力量，授業づくり，さらに教えることと学ぶことについて調べる。
第13回	教育をめぐる現代的課題３ （生徒指導の考え方）	いじめや不登校などの生徒指導上の問題について調べる。
第14回	教育をめぐる現代的課題４ （進路指導と自尊感情）	「進路指導の諸活動」，「自尊感情の考え方」について調べる。
第15回	教育をめぐる現代的課題５ （教職の専門性・時代を拓く教育の展開）	「教職の専門性とは何か」，「これからの教育にはどんな考えが必要か」について調べる。

れることで，自己に影響を与える考え方を見つけ，さらに詳しく内容を掘り下げるきっかけにもなった。学生にとっては，初めて見聞きする人物も多いようであった。

３．結果

授業を通して，一番関心があり，自分の心に響いた教育学者・教育思想家等の考え方についての課題レポートで学生が取り上げた人物名とレポートのタイトルを示したものが表２である。なお，取り上げられた人物の多い順に示した。

表２　一番関心のある教育学者・教育思想家等の人物名と課題レポートのタイトル

人物名	人数	タイトル
ジョン・デューイ	7	「印象的なデューイの思想」「進歩主義と経験主義」「経験と学び」「経験主義」「デューイの思想と現在の教育」「デューイが起こした教育改革」「子ども中心主義について」
ヘルマン・リーツ	5	「田園教育舎から学ぶ教員の在り方」「「教育」と「知識教授」の違い」「自然環境内教育の利点」「リーツと田園教育舎について」「田園教育舎から考える家庭教育と学校教育」
パウロ・フレイレ	4	「現代の教育の問題を救うかも…?!フレイレおじさん」「現代に必要な教育～生徒と教師のかかわり～」「学ぶことを受け身にしない教育」「パウロ・フレイレの教育批判に共感である！」
ペーター・ペーターゼン	4	「人間らしい学び」「イエナ・プランが子供たちに与える影響，教育現場での活用」「イエナ・プラン教育のメリットとデメリット」「移動の自由を保障する意義」
フィリップ・アリエス	3	「「子ども」という概念の誕生」「子どもの概念」「「子ども」の概念の形成」
フリードリヒ・W・A・フレーベル	3	「フレーベルの幼児教育の思想について考える」「幼児教育と勉強」「幼児教育の祖と現代教育」
エドウァルト・シュプランガー	2	「E.シュプランガーは人間と社会をどのように見たか」「文化と教育の関係」
ジャン・ジャック・ルソー	2	「消極主義と積極主義」「エミールについて」
マリア・モンテッソーリ	2	「マリア・モンテッソーリと彼女が行った教育について」「モンテッソーリ教育について」
イヴァン・イリイチ	1	「イリイチの思想と学校」
イマヌエル・カント	1	「自由と道徳～カントの主張～」
ウィリアム・ヒアド・キルパトリック	1	「プロジェクト・メソッド」
ソクラテス	1	「ソクラテスの無知の知と共有理解」
ミシェル・フーコー	1	「わが高校のパノプティコン大作戦～ブラック校則問題を添えて～」
ジェローム・S・ブルーナー	1	「発見主義について」
ヨハン・ハインリヒ・ペスタロッチ	1	「みんなが平等に受けられる学校教育」
ヨハン・フリードリヒ・ヘルバルト	1	「ヘルバルトとヘルバルト学派の教授段階説について」
ルドルフ・シュタイナー	1	「シュタイナー教育が導く人間の個性」
ジョン・ロック	1	「経験論と学校教育」

結果からは，ジョン・デューイを取り上げた学生が42名中７名となり一番多かった。ジョン･デューイに関するキーワードを挙げるとすれば，「子ども中心主義」，「経験主義」，「進歩主義」，「問題解決学習」，「社会的効率主義」などが考えられる。ジュン・デューイに続き，ヘルマン・リーツ，パウロ・フレイレ，ペーターペーターゼンなどが挙がっている。パウロ・フレイレ，マリア・モンテッソーリ，ルドルフ・シュタイナーに関して，授業では名前と簡単な紹介に留めた。それにも関わらず，特に，暗記のみによる教育を「銀行型教育」として批判したパウロ・フレイレについては，比較的上位に位置し学生の関心を集めていたことが示された。授業では34名の人物を取り上げたが，そのうち19名が選出され，多様な選択結果となった。また，上位を占めた人物は第５回から第10回の中の比較的後半に扱った人物が多かった。つまり，「第８回 20世紀のアメリカを中心とした教育思想」，「第９回 20世紀のドイツを中心とした教育思想」，「第10回 現代の教育思想」から選ばれた。なお，授業で扱った人物以外から選出されることはなかった。

次に，それぞれの学生が，なぜその人物を選んだのかについての記述についてその抜粋をみていくことにする。ここでは，選出した学生が一番多かったジョン・デューイと提示した情報量が比較的少ない中，上位に選出されたパウロ・フレイレを取り上げることにする。

ジョン・デューイ

Aさん「印象的なデューイの思想」

：私がデューイに興味を持った理由は，主に２つあります。１つ目の理由は，デューイの「経験主義」という思想に私は大変賛成だからです。デューイのいう「経験」とは，教育環境における「主体」と「客体」との相互作用のことであり，デューイは「経験」を練り上げ，さらに高い次元へと高めるために，「経験の再構成」を連続的に促すことが重要だと主張しました。デューイの経験論の特色としては，教科書中心の教育から生活経験へ，記憶中心の教育から問題解決能力重視へ，教師中心から学習者中心へ，抑圧状態からの学習者の解放，などといったようなものが挙げられます。２つ目の理由は，デューイは大変奥の深い教育思想家だと感じたからです。アメリカ教育思想の主流である進歩主義は，デューイの思想を理論的支柱にしたものであるにも関わらず，そのデューイでさえ進歩主義の教育を批判したということにとても衝撃を受けました。

Bさん「進歩主義と経験主義」

：第８回の講義を受けた時から，デューイの進歩と経験の複雑な視点について興味が

あったので今回調べました。また，父親がデューイの著書『学校と社会』を持っていたので，それも読みました。

Cさん「経験と学び」

：なぜデューイを選出したかというと，高校の時の倫理で印象に残っており，教育の道に進む自分にとって大事なことを教えてくれる存在だと感じていたため，今回の機会に詳しく知ってみたいと思ったからである。

Dさん「経験主義」

：デューイの教育思想を取り上げた理由は，子どもが自発的に試みて経験することによる学びは現代でも重要だと思うからである。確かに，長い伝統があり体制が整っている系統主義に対して，経験主義には文化体系の習得が困難であることや適切な体制を整えるのが難しいというデメリットがある。また，経験主義の教育課程では新たな経験による知識を学習者自身が自ら構成しなくてはならないため，知識が体系的に定着しないことも指摘されている。しかし，学習者の関心や興味を重視した学習では子どもたちが楽しんで意欲的に学ぶことができると思う。また，主体的に学ぶ姿勢を身につけるためにも重要だと思う。以上のように，経験主義には短所もあるがデューイの思想は子どもが自ら学ぶ力をつけるために大切な考え方であり，現代の教育にも上手く取り入れていくべきだと思う。

Eさん「デューイの思想と現在の教育」

：私はジョン・デューイについて，高校生の時に倫理の授業で学習した。しかし，デューイの教育思想についてはよく知らなかった。教育原論の授業でデューイの教育思想について学び，現在の学校や教育に求められていることが思想に含まれていると感じたため，このレポートにデューイを選んだ。

Fさん「デューイが起こした教育改革」

：私がデューイを取り上げた理由はデューイの考え方が現在の教育に大きく関係し経験主義は現在の教育にとって必要だと考えたからである。私は現代の教育に必要なものは経験主義教育であると考える。現代の子供たちは失敗を恐れ最初から行動しない子たちが増えていると考える。小学校から高校まで教師から知識を与えられそれを活用するときはせいぜい受験の時だけであろう。就職して大人になるほど活用されないものはある。そこで実際に体験してみる。そういった経験を増やすことで子供の意欲も向上すると考える。だからもっとそういった実践的なものを増やすべきだと考える。しかし，基礎学力が低下するという批判も一理あると考える。だからバランスを考え，将来を担っていく子供のためにその時にあった教育をしていくべきであると考え

た。

Gさん「子ども中心主義について」

：私は，アメリカの教育学者のジョン・デューイさんを選んだ。理由は，デューイさんの「子ども中心主義」という考え方が，養護教諭にとってとても大切なことだと考えたからである。保健室に来る子どもは一人一人違う。けがをしてくる人もいるだろうし，熱っぽくてくることもある。あるいは，何か悩みがあってそれを聞いてほしくて来る人もいるだろう。養護教諭は，学年や性格，育ってきた環境がそれぞれ全く異なった子どもたち全員に対応しなければならない。そして一人一人の子どもにとって最適な対処法を考え出さなければならない。子ども中心という考え方が必要だと感じた。私は，今まで，限られた人としか交流したことがなかった。自分よりも学年が小さい人とかかわったことがあまりない。よって，この機会に子どもの側から物事を考えるとは，どのようなことなのか知りたいと思った。

パウロ・フレイレ

Hさん「現代の教育の問題を救うかも…?!フレイレおじさん」

：現在の教育が，子どもの限りない才能や可能性をつぶしているのではないかという考えを知り，そこに疑問を持った。「パウロ・フレイレ」の考えは，変わりゆく時代に対応できるこれからの教育の在り方を考えていくうえでとても参考になると考える。（－中略－）他にも，フレイレは「対話」の重要性について主張している。「対話」は養護教諭にとって，とても重要なキーワードだ。養護教諭は怪我や体調不良の子どもの対応をするだけだと思われがちだが，対話を通して子どもたちに気づきを与えるという重要な役割を担っている。例えば，怪我で保健室に来た子どもに対して「痛かったね。手当てするね。」という一方的な声掛けではなく，対話を通して「どうして転んでしまったの？」，「次転ばないようにどうすればいいかな？」など子どもと対話し，子どもの言葉で説明させることで，その子にとっての「学び」が生まれると私は考えている。もちろんその子の感情や思いに寄り添うことは必要だし，対話が尋問のようになってしまってはダメなのですが，あくまでも教育者として子どもたちに学びを与えられる存在であるべきだと思う。

Iさん「現代に必要な教育～生徒と教師のかかわり～」

：近年，日本を含めた様々な国で，生徒が主体，教師はサポート役という教育が重視されつつある。その中で私は子供が主体となる教育（子供の自主性を尊重するような教育）が子供の価値観や学びにどういった影響を与えるのか興味を抱いた。そのため，

過去の「生徒，教師」の関係に見られた，支配－被支配のような関係が変遷していくきっかけとなった人物や，子供を重視した教育に向けた教育方法（学校の体系）の変化を見ていきたいと思い，かつての教師と生徒の関係に批判的な視点を持っていたパウロ・フレイレについて調べることにした。

Jさん「学ぶことを受け身にしない教育」

：今の学校教育は授業を聞き，ノートをとり，テストに備えて覚える…といったことをただ繰り返しているだけで，多くの子どもは受け身の姿勢で学んでいるように感じる。しかし，子どもは自主的に学ぶ必要があり，フレイレの問題提起型学習はアクティブラーニングに繋がっていると感じ，取り上げることにした。

Kさん「パウロ・フレイレの教育批判に共感である！」

：パウロ・フレイレは教育における一般的な形態である，暗記のみによる教育を「銀行型教育」として批判した。私も現代の教育は暗記を主とした教育で子供が受動的になり，子供の自由を奪ってしまっているのではないかと考える。また，暗記による教育は将来役に立つのか，暗記する必要があるのかということについて疑問に思っており，私の考えと共通点があるのではないかという点で関心を持ったため，この人物を取り上げることとした。

以上のように，選出した理由について，ジョン・デューイに関しては，Aさん，Bさん，Cさん，Dさん，Fさんでは「経験主義」，Aさん，Bさんでは「進歩主義」，Eさんでは「現在の教育との関係」，Gさんでは「子ども中心主義」に関する記述がなされ，パウロ・フレイレに関しては，Hさんでは「対話の重要性」，Iさんでは「支配者と被支配者の関係」，Jさんでは「問題提起型学習」，Hさん，Kさんでは「銀行型教育への批判」に関する記述がなされていた。また，Cさん，Eさんでは高校の「倫理」の授業で初めて学習したとの記述があり，Gさん，Hさんでは養護教諭課程という自己の専門領域とのかかわりについての記述があった。Bさんでは父親という他者による影響についての記述がなされていた。

４．考察

前章の結果についてそれぞれ考察することにする。学生が興味・関心のある教育の考え方について選出した人物で一番多かったデューイについては，その名前に比較的聞き覚えがある学生が多かったのではないか。そのことがまず選出のきっかけになっているように考えられる。そのうえで，「経験主義」，「子ども中心主義」などについては，日常の教育現場から想像することができ，実感を伴う考え方であったことが挙げられる。パウロ・フ

レイレについては，前述のとおり，授業担当者からの情報提供が少ないにもかかわらず選出した人数が上位になった。これは，詰込み主義への批判，まさに知識基盤社会での教育の在り方が叫ばれている中で，学生の意識もその考えを受け入れやすい状態になっていたと思われる。前章の結果において詳細は示していないが，上位を占めていたヘルマン・リーツ，ペーター・ペーターゼンについても，前者は包括的な人格教育を目指し都市から離れた自然豊かな環境に設置された寄宿制学校である「田園教育舎」を採用，提唱し，後者は学年別に編成される従来の学級制度を廃止し基幹集団に代えるところにその特色を持つ「イエナ・プラン」[3)]を実践し提唱した（金田，2018）。教育におけるこれらの考え方についても，学生たちはその名称自体は知らないまでも何らかの予備知識が作用している場合が考えられる。それらの内容もメディアを通した議論を共有している可能性があるからである。したがって，選出しやすい状況がすでにあったことも考えられる。しかし，いずれの場合も，現在の教育のおける問題点を解決するうえで必要なことは何かという自己の問いによる興味・関心であったことは明らかである。

次に，表１，表２からわかるように本研究対象期間の後半に取り上げた人物・考え方が上位を占めた。これについては，直近の授業内容が単純に学生の記憶に残っていたという可能性がまったくないわけではないが，教育の考え方，思想というものは，歴史とともに発展し進歩を遂げている。過去の成果を見届けそれを土台にして新たな時代が生まれる。そのように考えれば，あとの時代になるにしたがって，現代の教育との共通な課題があり，それについて解決策を講じるという点において学生は受け入れやすい状況になったと考えた方がむしろ自然である。ただし，これはあとの時代の考え方がすべて正しいと言っているわけではなく，以前の考え方においてもその固有の考えが今現在に生きている場合もあることは言及しておく。

また，選出した人物が19名になったことについては，まさに捉え方における多様性であり，様々な着眼点があることを意味している。１名の学生だけが選出した人物が10名挙がった。それぞれの理由が，際立った特徴を有しているかもしれないが，本研究では多くの学生が選出した人物を取り上げた。

高校時代に授業ではじめて学習した人物を選んだということに関して考察すると，これは今回の授業で学習することが複数回目であることを示している。はじめて学習したときに，少し心に響くものがありその内容に再び出会った場合，選出する可能性が高まることが考えられる。もう少しいえば，今回はじめて学習した人物・考え方を今後，改めて学習することになった場合は，その学生の教育観の形成に大きく影響する可能性があるということにつながる。そのように考えると，多くの考え方と接し，理解し，その積み重ねを通

して取捨選択することで，結果として教師としての豊かな教育観の形成に寄与するものになるといえる。

今回，学生自身の専門領域と教育思想をつなげて考えていたGさん，Hさんのような学生もいた。これは今後の自己の進む道をより具体化するうえにおいて重要な視点であると指摘しておきたい。また，Bさんのように多様な他者の存在が自分に影響を与えるきっかけにもなっていた。本研究の場合は家族であった。ここでは，興味・関心を促進する作用の重要性も確認できた。

これまで，どのような教育思想に興味・関心を示し影響されうるものかという現状を確認してきたが，次にそれにかかわる課題について考察することにする。「第１章 問題の所在と目的」で，学生の興味・関心について，「本研究では多くの教育学者，教育思想家の中から主体的に一人を選択する中で学生の興味・関心について考察する」と述べた。授業において毎回の「疑問事項」を調べ考えたうえで，確かに多くの教育思想から主体的に選ぶことはできた。とはいえ，選ぶ機会を与えられて初めて深く学習したという見方もできる。つまり，学生の主体性がどこまで発揮できていたのかという実践における課題である。強いて挙げるとすると，その一つが，課題レポートについては授業で取り扱った人物以外の人物を選択してもよいとしたが，結果的に授業で扱った人物以外から選出されることはなかったことである。学生には，主体的に学習に取り組んでもらおうとする思いはすべての大学教員が共有しているといっても過言ではない。その場合どう考えればよいのだろうか。それに関しては，自己喚起の重要性を挙げることができるかもしれない。その際，誘導するのではなくそのきっかけを与えるだけに留めることが重要になるのではないか。そうだとすると，本研究においても，授業での教育思想の学習や提供が学生の主体的な学習のきっかけとなるような教員からのかかわりがより必要になる。その一方で，初等中等教育段階における生徒指導に関する文脈ではあるが，山本（2019）は，教師の指導性と子どもの自主性について，「教師の指導性が強くなると子どもの自主性が弱くなり，教師の指導性が弱くなると子どもの自主性が強くなるというのではなく，また両者のバランスを適当なところでとるというのでもない。子どもの自主性は優れた指導性のもとで発揮されるが，稚拙な指導性のもとでは発揮されないのである」としている。つまり，学生の主体性の問題は，教員の指導性に直接関係するということになる。留意すべき観点である。

５．まとめと今後の展望

本研究の目的は，教員養成課程に所属する，教師を目指す大学１年生がこれから身につ

けるべき教育観の形成過程において，これまでの教育学者，教育思想家のどのような考え方に興味や関心を示し影響されるのかということに関して，その現状と課題について探索的に考察することであった。結果として，基本的には現在の教育における問題点を解決するうえで必要なことは何かという自己の問いによる興味・関心であったことが明らかになった。それを促進する要素として，以前に心に響いた教育思想と再び出会うこと，自己の専門領域とつなげて考えることができる教育思想であること，多様な他者の存在が重要であることが明らかになった。一方，課題としては，学生の主体性の問題を挙げることができる。ただし，学生の主体性の問題は教員の指導性の問題でもあることに留意する必要がある。本研究の調査対象は，筆者が「教育原論」の授業を担当することになった養護教諭養成課程の学生であった。そこで，明らかになったことはこのような限定された集団での結果の一部に過ぎないが，現実に即した個々の結果であることより，これらを本研究のまとめとする。

近年，コンピテンシーという言葉がよく使用される。成果につながる行動特性を意味する。子どもたちに必要な能力としてDeSeCo（経済協力開発機構（OECD）が組織したプロジェクト）が定義した主要能力「キー・コンピテンシー」からの影響とされる。これからの時代の教育の在り方について，奈須（2019）は，「コンピテンシー・ベイスの教育は，カリキュラム論的には社会中心の特質を持ちやすい」としたうえで，「教育は社会の変化に付き従っていくとする『社会的効率主義』か，社会建設の主体となる子どもの発達支援を通して社会の変化を生み出すとする『社会改造主義』のいずれを選択するのかにより，その様相と機能はすっかり異なる」としている。つまり，教育は社会の変化に従うとする考え方なのか，教育で社会の変化を生み出すとする考え方なのか，そのどちらを選ぶのかに言及している。これは，20世紀のアメリカを中心とした教育思想の一側面に通じる。変化の激しいこれからの時代における教育のあり方の根本がいま問われている。

〈注〉

1）狩猟社会（Society 1.0），農耕社会（Society 2.0），工業社会（Society 3.0），情報社会（Society 4.0）といった人類がこれまで歩んできた社会に次ぐ第5の新たな社会をイノベーションによって生み出すという意味で「Society 5.0（ソサエティー5.0）」と名付けられた。

2）研究協力者の特定を防ぐために年度を伏せた。

3）イエナ・プラン教育はドイツが発祥であるが，オランダにおいて多くのイエナ・プラン校が設立され実践された。日本においても2019年4月にイエナ・プラン校が長野県

に初めて設立された（学校法人茂来学園 大日向小学校，2019）。

〈引用文献〉

安部　孝（2017）「学生の「教育観」の形成についての考察（1）「教育原論（授業）」の検討」『名古屋芸術大学研究紀要』38，pp.1-14

胡田裕教（2020）「高等学校におけるキャリア教育に関するカリキュラム研究の課題－政策・実践・理論・研究の系譜の検討を通して－」『名古屋大学大学院教育発達科学研究科紀要（教育科学）』第67巻第1号，pp.47-59

学校法人茂来学園　大日向小学校（2019）HP（https://www.jenaplanschool.ac.jp/）2020年10月閲覧

萩原真美（2017）「「教育原論」実践報告：教職課程履修者における教職課程で学ぶ意義：子どもの権利，チーム学校，教育支援の視点から」『マテシス・ウニウェルサリス』19（1），pp.139-157

堀　哲夫（2013）『教育評価の本質を問う 一枚ポートフォリオ評価OPPA 一枚の用紙の可能性』東洋館出版社

金田健司（2018）「第9章 20世紀の教育思想（2）－ドイツを中心に－」滝沢和彦（編）『教育学原論』ミネルヴァ書房，pp.99-109

前田晶子（2017）「教育の社会史が教育原論をどう豊かにしたのか：中内教育学が拓いた地平から「発達」概念を再考する（特集〈公共社会と教育〉再考：中内敏夫の研究を踏まえて）」『〈教育と社会〉研究』（27），pp.7-17

文部科学省（2018）『高等学校学習指導要領（平成三十年告示）』

内閣府（2016）「第5期科学技術基本計画」（https://www8.cao.go.jp/cstp/kihonkeikaku/5honbun.pdf）2020年10月閲覧

奈須正裕（2019）「コンピテンシー・ベイスの教育が抱える可能性と危うさ（研究討議「資質・能力」を哲学する：汎用的○○は未来を拓く？）」『教育哲学研究』（119），pp.1-6

山本敏郎（2019）「第4章 子ども理解と教師の指導・支援」春日井敏之・山岡雅博（編）『生徒指導・進路指導』ミネルヴァ書房，pp.57-72